

論文の内容の要旨①

論文題目 三願転入と信の構造 ～超越者との関係に即して～

氏名 岡田 大助

本論考は、親鸞の思想における三願転入と信の構造的連関を、親鸞が超越者とどのように関わったのかを考察することを通して、明らかにすることを目的とするものである。親鸞の思想は一貫して、超越者との関わりを主題とするものである。その関わりをめぐる一連の流れを、三願転入の三願それぞれに即して追い、それらの関わりの内実を探りながら、三願転入と信の構造的連関の解明を試みるのが本論考の大きな筋道である（序章）。

第一章では、三願転入の概要について、三願転入の文と、『浄土和讃』の解釈を通して確認する。三願転入とは、阿弥陀仏の十九願の教えから、二十願の教えに移り入り、さらに、十八願の教えへと転じ入ることである。ここでは、それぞれの願の内容と、十九、二十願の往生へのつまずきの原因、および、それらとの対照で浮かび上がる十八願が往生できる原因を、概略として示す。

第二章では、十九願の教えにしたがう人々と、超越者との関係について考察する。十九願の教えにしたがう人々は、行としては、多種多様な善を修めて、また心については、自らの力で菩提心を発し、真実の心で願を発して、阿弥陀仏の浄土に生まれたいと願って、阿弥陀仏と出会おうとする。多種多様な善とは、主に、視覚的な仏と〈見て〉出会おうとするものである。しかし、その試みは、大きく二つの流れから、つまずきに帰結する。第一に、視覚的な善は、浄土で見る対象のように、巨大であったり、細微であったりと、一瞬で見極めることができないようなものである場合、段階的な差別、更には遅滞をもたらし、完全にそれを見極めることはつまずきに帰する。第二に、視覚的な善は、人々に感覚的な快樂をもたらすが、人々は、そこで快樂に執着し、自利に閉じてしまい、三宝、利他から隔てられてしまう。では、そのように十九願の教えにしたがう人々が、阿弥陀仏と出

会うことができない原因とは何か。それは、心が自力だからである。すなわち、自力の善は、自らの善をなす力を信じることになり、結果として、阿弥陀仏の智慧を疑い隔てることになるからである。また、行や心が雑、すなわち兼ね修めるものだからである。すなわち、心が一つに定まらないままに、ある程度の善がもたらす快樂に執着し、不完全な所に安住してしまい、その結果、真実の浄土に往生し、阿弥陀仏と出会うことは、つまずきに帰することになる。

第三章では、二十願の教えにしたがう人々と超越者との関係について考察する。二十願の教えにしたがう人々は、行としては、名号を唯一の行として称えて、心としては、思いを阿弥陀仏の浄土にかけて、自ら称える名号を善として、心から差し向けて、その報いによって、阿弥陀仏の浄土に生まれようとする。しかし、そのような心で名号を称える場合、その善を修める自らの力を、自らの根拠とすることになり、仏の智慧を疑い隔てることに帰結してしまう。また、自らの善の報いが樂をもたらす循環に閉じてしまい、自利利他を伴う仏の真実とは隔たりが生じてしまう。ゆえに、出会いはつまずきに帰する。また、二十願で勧められる専一な称名念仏は、それしかしないという専一な行いである。またそれは、修めた善の量の多少や時間の長短を問題としないもの、さらにいえば、わずか一瞬でよい行いであり、平等な行いである。また、このような行いは、阿弥陀仏が選んだ行いである。そして平等かつ仏の選んだ行いであるがゆえに、極樂の一味平等なる様相とも連続するものである。よって、多種多様なるがゆえに差別性をもたらし、平等な浄土と隔たりが生じてしまう十九願の善と比べて、その優位が確定し、二十願に移りゆくことが勧められる。しかし、二十願の善も、結局のところ、つまずきに帰結する。なぜか。それは、五濁の時代の煩惱のさかんな衆生は、そのような善を行おうとしても、強い好い縁に出会わない限り、信じるのが難しく、容易に転変させられてしまうからである。また、それは、行は専らであっても、心が雑心であるからである。雑心とは、助業と正業とを兼ね修める心のことであり、二十願の教えにしたがう人々の一部は、その雑心の称名念仏によって往生しようとする。しかし、雑心の念仏は、業は一つに定まり、一瞬の速やかな業であっても、心が兼ね修める心、ようやく進む遅い心であるので、一瞬に一つに定まる十八願の真実の心と比べると、いまだ隔りがある。

第四、第五章では、十八願の教えにしたがう人々と、超越者との関係について考察する。十八願の教えにしたがう人々は、他力の信心すなわち十八願の三信によって、阿弥陀仏との出会いが成就する。その三信の内実は、まず至心とは、阿弥陀仏の真実心、すなわち、阿弥陀仏が因位の法蔵菩薩の時修めたあらゆる善根が、名号として、衆生に施されたものである。次に、信樂とは、名号を聞いて信じることである。また、信樂とは、第一に、阿弥陀仏が衆生に施した真実の信心であり、第二に、衆生が阿弥陀仏の誓願の始まりから終わりまでを聞いて疑う心がないことである。また、信樂の樂とは歡喜といわれる。歡喜とは、阿弥陀仏の歡喜させるはたらきを、衆生が歡喜愛樂するもので、何を歡喜するのかといえば、阿弥陀仏の名号、所有の善根回向、一念の淨信を、歡喜するものである。また、その歡喜とは、誓願の通りに往生が確定しやがて浄土に生まれることに対して、身も心も喜ぶことである。そして、その喜びは、欲を満たすような人々の心と連続する性質のものではなく、他なるものとしての真実そのものに属する喜びである。また、信樂には一念がある。一念とは、名号を称え聞く極めて短い一瞬に阿弥陀仏が開き発した信樂を衆生がそ

れを聞き受け入れるもので、その信心を獲たことに、思いはかることを超えた広大な慶びを伴う。また、その一念は、兼ね修める心なく、一つに定まった心を獲ることである。次に、欲生我国とは、阿弥陀仏の命にしたがい、阿弥陀仏の極楽浄土に生まれたいと願うことである。また、その三信を獲た結果えられるものは、それら信心を獲る一瞬、死後のことではなく、時と日を隔てないその時に、正定聚に定まり、往生が確定することである（第四章）。次に、その三信の内、信樂について、阿弥陀仏が施す心としての側面と、それを衆生が獲るといふ側面、換言すれば、衆生の側からの捉え返しについて、信樂積と至誠心・深心積から詳しく見てゆく。まず、前者について、信樂積によれば、阿弥陀仏が施す信心、信樂とは、仏の、完全な慈悲の心であり、煩惱に覆われることのない心である。それは、衆生がはるかな昔より、煩惱に汚され、真実の善ができず、仏の真実とは断絶してきたことを見て、阿弥陀仏因位の法蔵菩薩が、それら衆生の苦しみを抜き楽しみを与えてやりたいと思い、全く煩惱に覆われることなくあらゆる善を修め、それを衆生に施したものであり、利他真実の信心といわれる。次に、後者について、至誠心・深心積によれば、第一に、衆生の姿について、自らが、はるかな昔より今まで、煩惱によって苦しみながらも、真実の善ができず、浄土とは断絶していると、深く信じるべきであるという（第一深信）。第二に、阿弥陀仏の誓願について、それが、衆生を摂め取ることに、疑いがなくなり、必ず往生できると深く信じるべきであるという（第二深信）。そして、二つの深信の関係は、自らの力では善ができないことを知り、その善によって往生しようとするをやめて、代わりに、唯一のものとして、阿弥陀仏の心を受け入れるというものである。この両者は、自力の善をつきつめた先に、真実との断絶を知り、そこにおいて、自力の心を捨てて、他力の心を受け入れるという三願転入と相即するものである（第五章）。

終章では、三願転入のはざまについての試論を提示する。二十願の結びの私積は、信樂積の機に関する記述、および二種深信中第一深信と、表現、内容において呼応している。このことから、十八願転入の後も、二十願の雑心や自力の心が、その十八願の信心の内部構造の中に位置づくことになり、十八願転入後も、二十願の心が、親鸞にとって今の私の問題としてあったことが知られる。また、三願転入の文には、一度は二十願を離れ、十八願に転入してしまった後にも、十八願へ転入しようとし続けることが表現されている。これらのことから、十八願転入後も、二十願の心は単純に無くなっているのではなく、その心を離れてしまっておりながら、かつまた、そこから離れようとし続けていることが示されている。続けて、以上の点を別の視点から捉え返すために、自力の心と疑心の連続性に注目し、疑心について考察する。そこから明かになることは、十八願転入後も、衆生に即して見れば、煩惱から離れられない以上、そこから派生する自力・疑心は無くならない。しかし、衆生は、阿弥陀仏の誓願と出会い、自らをそのような煩惱・自力・疑心から離れられないものと深く信じることに於いて、阿弥陀仏の誓願をその通りに疑いなく受け入れ、名号に内在する阿弥陀仏の疑心なき心を獲るならば、その心を用いているその限りにおいて、疑心・自力の心は無くなっているということになる。その他、以上の説を検証するために、自力を「離る」の用例、自力を「捨つ」の用例が検討される。また、そこから派生して問題となる廻心の一回性の位置づけが試みられる。また、三願転入のはざまの時間について、「今」をつねなる現在として捉える。最後に、今後の課題として、三一問答、難化の三機等、本論考では論じることのできなかつたいくつかの問題を提示する。